

文部省選定
芸術祭優秀賞
優秀映画鑑賞会推薦
日本映画ペンクラブ推薦

優秀映像教材選奨最優秀作品賞
キネマ旬報ベストテン第2位

伝統工芸の名匠

ご す ざん まい
吳 須 三 昧

— 近藤悠三の世界 —



作 品 名：シリーズ 〈伝統工芸の名匠〉
「呉須三昧」 近藤悠三の世界
(35mm/カラー/32分)

企 画 製 作：財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製 作 協 力：株式会社 桜映画社

制 作 指 導：南 邦男

製 作 ス タ ッ プ：製 作・村山和雄

脚 本・監 督・村山正実

撮 影・村山和雄 照 明・浅見良二 本橋俊男 長坂 潔

音 楽・長沢勝俊 編 集・守随房子

ナレーター・相川 浩

協 力：文化庁文化財保護部 東京国立近代美術館
京都国立近代美術館 富本憲吉記念館
河井寛次郎記念館 今藤長十郎、中村正信
宗村昶出子



京都の清水寺下に生れた近藤悠三は、12歳の時から京都市立陶磁器試験場附属伝習所に入りロクロを修業。ここで若き日の河井寛次郎や浜田庄司に出会う。また、19歳から22歳まで富本憲吉に師事、陶芸家としての厳しさを教えられた。

戦後、染付ぞめつけに専念した。あざみ、ざくろ、梅、山などをモチーフに雄勁は筆致で写実的な絵模様を、黒みを帯びた呉須こすの濃淡の階調によって描く独自の作風を拓いた。そして50代頃からは、この染付に赤絵や金彩を加える工夫を始め、染付が年とともにごく自然に華やいだ。

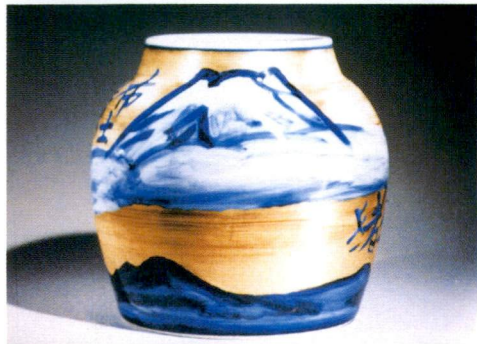
70年にわたる作陶生活の中でも、特に生涯の夢として抱いてきた『富士山』をモチーフとし、ますます豪宕華麗な境地を示している。

「私の陶器はうまくもないし、秀れてもない。ただ、自分は一生懸命いのちをかけてやってきたので、どこかにその魅力を感じて、私の作品をみんなが喜んでもっていってくれるのだろう」と彼は云う。

近藤悠三は、一筋の道を長い時間をかけて、じっくりやってきた。いつも正直に自分のものを出して……

近藤悠三・年譜

- | | |
|-------|--|
| 明治35年 | 2月8日京都に生れる。本名・雄三。 |
| 大正3年 | 京都市立陶磁器試験場附属伝習所ロクロ科に入所。 |
| 大正10年 | 富本憲吉氏の助手として大和安堵村に行く。 |
| 昭和3年 | 第9回帝展に出品、初入選。以後13回連続入選。 |
| 昭和14年 | 第3回文展で特選。 |
| 昭和25年 | 日展の審査員となる。 |
| 昭和29年 | 日本工芸会が発足。以来、日本伝統工芸展鑑査員、授賞委員、常任理事、近畿支部幹事長などを歴任。 |
| 昭和31年 | 第3回日本伝統工芸展で日本伝統工芸会賞を受賞。 |
| 昭和33年 | 京都市立美術大学の教授に就任。 |
| 昭和44年 | 京都市立芸術大学の学長に就任。 |
| 昭和45年 | 紫綬褒章受章。 |
| 昭和46年 | 京都市立芸術大学学長を退任。同大学名誉教授となる。 |
| 昭和48年 | 勲3等瑞宝章受章。京都市文化功労者章受章。 |
| 昭和52年 | 「染付」技法の重要無形文化財保持者に認定される。 |
| 昭和55年 | 紺綬褒章受章。 |
| 昭和58年 | 富士山を主題とした連作を発表。 |
| 昭和60年 | 2月25日逝去（享年83歳） |



染付について

陶磁器の白い素地に、^{ニハシ}鼻須と呼ばれる酸化コバルトを含む顔料で文様を描き、透明釉をかけて焼いた藍色の文様のあるやきものを、わが国では「染付」と呼んでいる。

中国・元時代に始まった染付の技法は、日本では17世紀の初め、朝鮮の陶工によって有田で焼造されたのが最初である。その後、江戸後期になって各地に伝播し、京焼の染付も、江戸初期以来の京焼の伝統の上に独自の様式・技法を発展させた。

染付の技法には、骨描き、だみ、つけたて、ぼかしなどの筆法があり、陶芸の伝統的な装飾技法として、染付単独、または、上絵付と併用される極めて重要な技法である。

公益財団法人 ポーラ伝統文化振興財団

<http://www.polaculture.or.jp>

〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-2-10 ポーラ第2五反田ビル
TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597